

寝覚

古名

寝覚床

又

三返

季は	地は	シテ	ツレ	ツレ	ワキ	前
春	信濃	三返の翁	(謡なし)	里人	老翁	勅使
		天女	龍神			

「賢き君の勅を受け。く。東の旅に急がん。

「そもそも是は延喜の聖主に仕へ奉る臣下なり。さ
ても信濃の国木曽の郡に。寝覚の床とて在所あり。
彼所に三返の翁と申す者。寿命めでたき薬を与ふ
る由君聞し召し及ばせ給ひ。急ぎ見て参れとの宣
旨を蒙り。唯今信濃の国寐覚の里へと急ぎ候。

道行
「思ひ立つ。空に重なる雲の袖。く。靡きて帰る
雁金も。山又山を越え過ぎて。行けば程なき旅衣。

木曽の御坂も近づくや。嵐に更くる夜半の空。寐
覚の床は是かとよ。く。

詞
「急ぎ候ふ間。是は早寐覚の床に着きて候。此所に
て彼翁を尋ねうするにて候。

シテ、ツレ一声
「信濃路や。木曽の御坂の春風に。行方も知らぬ花
ぞ散る。

ツレ
「霞こめたる谷の戸に。

二人
「世を鶯の声しげし。

「所から春立つ山路分け過ぎて。

二人 「採るや薪の尾上の鐘。朧々と聞き馴れて。たどる
や老の坂ならん。

歌 「立ち上る。木曽の麻衣袖しをり。く。賤が家
居の業なれば。崖路の橋も馴れく。いくへ重
なる白雪の。解けて落ち来る谷川の。水も岩根や
伝ふらん。く。

ワキ詞 「如何に是なる老翁に尋ねべき事の候。

シテ詞 「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。見奉れば此
あたりにては見馴れ申さぬ御姿なり。若し都より
の御下向にて候ふか。

ワキ 「実によく見て有る物かな。是は延喜の聖主に仕へ
奉る臣下なるが。此所に三返の翁と申す者。寿命
めでたき薬を与ふる由君聞し召し及ばせ給ひ。急
ぎ見て参れとの宣旨なり。彼老翁が私宅を教へ候
へ。

シテ「さては勅使にて御座候ふぞや。あら有難や候。総じて此三返の翁と申すは。生所もあらず出所もなく。

ツレ「唯おのづから其まゝにて。寐覚の枕松が根を。

シテ「宿りと定むる翁なれば。定めてこゝに来るべし。

ワキ「実にくゝ是はいはれたりと。岩根の枕寐覚の床に。

シテ「暫く御待ち候へとよ。

ワキ「暫し休らふ。

シテ「其内に。

地「日も夕暮に程もなく。くゝ。なるや弥生の空なれば。月も朧にさし出でゝ。山の端白き松の風。枝を鳴らさぬ木の下に。暫し休らふ旅居かな。くゝ。
ワキ詞「なほくゝ寐覚の床の謂委しく御物語り候へ。

クリ地「そもそも此寐覚の床と申すは。役の行者暫く御座

をなし給ひて。観念の眠りを覚まし給ふ。

シテサシ「然るに彼三返の老翁は。生所も知らず出所もな

く。

「唯おのづから忽然と。顕はれ出でゝ寐覚の床に。

千年を送る其内に。寿命めでたき薬を服し。三度
若やぐ故により。三返の翁と名づけたり。

クセ
「或る時翁申すやう。羿養射術を伝へて。其名を雲

の上にあげ。されば愛染明王は。定の弓恵の矢にて。悪魔を従へ給ふなり。我は又御薬の。威徳を以て大君の。代を治めんと思ふぞと。勅使に申し上げゝれば。勅使喜悦の色をなし。汝如何にと宣へば。

シテ
「今は何をか包むべき。

地
「我此所に年経たる。三返の翁なるが。目前に來りたり。勅使暫く待ち給へ。夕月の夜もすがら。舞楽を奏し見せ申し。又御薬を与へんと。いふかと見れば老翁は。岩陰に寄ると見えて。行方知らずなりにけり。行方も知らず失せにけり。
(中入)

地「天つ風。く。雲の通路吹きとぢよ。乙女の衣色々に。糸竹も音を添へて。波の鼓声澄むや。海青樂を奏しけり。

後ジテ「そもそも是は医王仏の化現。無病息災の方便の為め。三返の翁仮に顕はれ出でたるなり。

地「其時老翁肩を開き。く。青天遙かに見渡しければ。

シテ「東南に雲晴れ。西北の風も吹きをさまつて。

地「花降り異香音樂の響き。舞樂の数々乙女の袂。返すぐも面白や。

地「夜遊の舞樂も時過ぎて。く。有明方の月も。落ちくる折からに。不思議や川波はげしく荒れて。二龍の姿は顯はれたり。

地「両龍王は川波に浮び。く。彼御薬を捧ぐる氣色。汀に坐してぞ見えたりける。

シテ「老翁悦びの思ひをなして。く。彼客人の御慰み

に。神通自在の秘術を顯はして。夜遊の戯ぶれなし給ふ。(樂)

シテ
「かくて時移り頃去れば。

地
「かくて時移り頃去れば。彼御薬を君に捧げ。勅使に与へて是までなりと。木曽の棧ゆらりと打ち渡り。帰り給へば。龍神も東西に飛行の翔り。波に戯ぶれ巖に上れば。夜も白々と明方の空に。く。
夢の寐覚は覚めにけり。